

1. 略歴

1991年4月	東京大学教養学部文科三類	入学
1993年4月	東京大学文学部印度哲学専修課程	進学
1995年3月	同上	卒業
1995年4月	東京大学大学院人文社会系研究科アジア文化研究専攻修士課程	入学
1998年3月	同上	修了
1998年4月	東京大学大学院人文社会系研究科アジア文化研究専攻博士課程	進学
2002年3月	同上	単位取得退学
2002年4月	東京大学大学院人文社会系研究科	助手（～2005年3月）
2004年9月	博士（文学）（東京大学）	
2005年4月	東京大学大学院人文社会系研究科	学術研究支援員（～2005年9月）
2005年10月	日本学術振興会海外特別研究員（ハンプルク大学アジア・アフリカ研究所）	（～2007年9月）
2007年10月	東京大学大学院人文社会系研究科	学術研究支援員（～2008年3月）
2008年4月	東京大学大学院人文社会系研究科	特任研究員（～2012年3月）
2012年4月	筑波大学大学院人文社会科学部研究科	助教（～2013年3月）
2013年4月	東京大学大学院人文社会系研究科	特任研究員（～2017年3月）
2017年4月	東京大学大学院人文社会系研究科	准教授

2. 主な研究活動

a 専門分野

- (1) インド仏教の論書研究
- (2) チベット撰述の注釈文献に関する研究
- (3) サンスクリット語およびチベット語文献のXMLによるマークアップ方法の研究

b 研究課題

(1) インド仏教の文献は、大きく経・律・論の三つの分野に分けられる。そのうち、論は仏教思想家が著した哲学文献であり、論書と呼ばれる。この論書を主な研究対象としている。特にインド大乘仏教の一学派である瑜伽行派の論書を分析し、その思想形成の過程を考察している。この学派の思想は唯識思想として知られているが、最初期の文献では唯識思想は説かれず、ものの実在を前提にして思想が構築されている。この最初期の思想形態そのものの解明と、唯識思想へ展開した過程を解明し、仏教における唯識説の意義を考察することを課題としている。特にこのような哲学的思想と、大乘仏教としての倫理的実践の關係に着目して、瑜伽行派の思想を包括的に明らかにすることを目指している。

(2) (1)と関連して、チベット人によって著された瑜伽行派文献に対する注釈書の内容分析を行う。近年、発見・公刊された『カダム全書』という著作群には瑜伽行派文献に対する注釈が数多く含まれており、その内容の分析は喫緊の課題となっている。

(3) こうしたテキスト分析に関しては、電子化テキストによるデータベースの作成が効率の良い方法と考えられる。近年ではXMLを用いたテキスト分析が盛んに行われるようになってきたが、既存のガイドラインであるTEI:P5は、サンスクリット語およびチベット語の仏教文献の分析に関しては、改良の余地がある。実際に文献をエンコーディングしながら、具体的な問題提起をすることを旨とする。

c 概要と自己評価

(1) 従来の研究では瑜伽行派の哲学的な思想と、大乘仏教としての倫理的実践の關係性に着目した研究はほとんどなされてこなかっただけでなく、一部の研究においては両者は思想的に見て無關係に發展したとさえされる場合も見られる。しかし、この学派の最初期の文献を分析すると、瑜伽行派の哲学的思想は、大乘仏教の倫理的実践と直結し、利他行を標榜する大乘仏教の行動原理に基盤を与えるものであることを示すことができる。これは従来の研究の視点に大きな改変を加えるものであり、重要な意義を持つと考えているが、成果は学会での発表のみであり、今後、論文の形で公開しなければならない。

(2) 『カダム全書』は近年になって発見・公刊されたもので、その全体像も明確になってはいない。そのため、科学研究費基盤Bに応募し、特に瑜伽行派の基本思想を扱う文献についての分析を行うための準備をしている。

(3) これまでに、非階層構造を持ったサンスクリット語文献のXMLによる分析について主に考察してきた。XMLは文字列をタグと呼ばれる記号(例: <p></p>など)で囲むことで、テキストデータを構造的に分析することができるが、タグ同士がお互いをまたぐような構造(非階層構造)をXMLで分析することは難しいとされている。サンスクリット語仏教文献で、明らかに非階層構造を持つテキストを例にし、XMLによるタグ付の可能性を模索した。また、この考察の過程で、一般的に文献は論理構造と物理構造の二重の構造を本来的に具えていることが明らかになった。そこから、テキストの内容分析を目的とする場合、XMLによるタグ付けは論理構造を優先させることで、例として取り上げた非階層構造のエンコーディングが可能になることを指摘することができた。これは複雑な構造を持つ文献の分析をより基本的な技術で行うための提案であり、今後、(2)の『カダム全書』の分析に応用が期待できる成果といえる。

d 主要業績

(1) 論文

高橋晃一、「『菩薩地』における菩薩藏 (bodhisattvapīṭaka) の位置づけ」、『インド哲学仏教学研究』、24、41-62 頁、2016.3

高橋晃一、「Conceptualization (*vikalpa*) of Other Sentient Beings in the Early Yogācāra texts」、『印度学仏教学研究』、67-3、2017.3

(2) 学会・シンポジウム発表

国内、高橋晃一、「初期唯識文献における「他人の分別」」、日本印度学仏教学会第67回学術大会、2016.9.4

国内、高橋晃一、「『菩薩地』『真実義品』における菩薩道」、日本印度学仏教学会第68回学術大会、2017.9.2

国内、高橋晃一、「非階層構造を含むテキストのマークアップ —論理構造と物理構造の観点から—」、国際シンポジウム デジタルアーカイブ時代の人文の構築に向けて —仏教学のための次世代知識基盤の構築—、2018.1.6

3. 主な社会活動

(1) 非常勤講師

大正大学非常勤講師

(2) 学会

日本印度学仏教学会、評議員、常務委員

仏教思想学会、幹事

東方学会

日本チベット学会

日本南アジア学会

International Association of Buddhist Studies

Japanese Association for Digital Humanities